

哲 學 第61集抜刷

バーヴィヴェーカによる
五根の無自性性論証
— 他学派学説批判を中心に —

田 村 昌 己

バーヴィヴェーカによる五根の無自性性論証

—他学派学説批判を中心に—

田 村 昌 己

0. はじめに

中観派の学匠バーヴィヴェーカ (Bhāviveka, ca. 490-570) は『中観心論』 (Madhyamakahrdayakārikā, MHK) 第3章第45偈から第65偈にかけて五根 (pañca-indriya) の無自性性論証を行っている。彼は、MHK III 45-55において、まず五根のうち眼根を取り上げ、それを見る主体と見なす見解及び見る手段と見なす見解の両見解を否定する¹⁾。そして、続くMHK III 56-63において、眼根に関するその他の諸学説を取り上げ否定する。この眼根に関する諸学説の批判は、バーヴィヴェーカが眼根に関して網羅的な考察を試みていることを端的に示している。本稿の目的は、この眼根に関する諸学説批判を考察し、同批判においてバーヴィヴェーカが意図するところを明らかにすることである。

1. 眼光線説批判

まずバーヴィヴェーカが取り上げるのは、眼光線 (cakṣūraśmi) 説である。MHKの注釈書『思択炎』 (Tarkajvālā, TJ) はこの眼光線説を「ある者」の見解として提示するに過ぎないが²⁾、同じ眼光線説を取り上げ批判する漢訳『般若灯論』はサーンキヤ学派 (僧法人) の見解として紹介する³⁾。また、チベット語訳『般若灯論』は「ある者たち」の見解としており、アヴァローキタヴラタはその「ある者たち」をミーマーンサー学派 (dpyod pa can) としている⁴⁾。しかし、後述するように、ここではニヤーヤ学派が特に意図されていると考えられる。

赤松[1990]によれば、ニヤーヤ学派は、五根はいずれも大種所造(bhautika)であり、対象との接触(sannikarṣa)によって知覚を生み出す即ち対象に到達して作用する(prāpyakārin)と考える。これら二つの前提のもと、眼根に関して導入されたのが眼光線説である。同説によれば、眼根は眼球(golaka)ではなく、眼球を基体とする光線(rāsmi)であり、その光線が対象へ到達してその対象を把握する⁵⁾。

パーヴィヴェーカはこの眼光線説を次のように否定している。

MHK III 56ab: na cakṣū rāsmivad yuktam akṣatvād itarākṣavat /

【主張】眼〔根〕が光線を持つもの(rāsmivat)であることは不合理である。

【証因】根(akṣa)だから。

【喩例】他の根のように。

これに対してTJは次のように注釈している。

TJ ad MHK III 56ab[D69b5-6; P74a5-6]: ji ltar ma bas kyang sgra thag ring po na 'dug pa thos la / yid kyis kyang yul dpag tshad stong gis bskal pa dag kyang shes mod kyī / de dag 'od zer dang ldan pa ma(D; om. P) yin pa de bzhin du mig kyang de dang 'dra bas de 'od zer dang ldan par mi rigs so //

例えば、耳〔根〕は遠くにある声を聞き、意〔根〕は1000 ヨーjanya離れた対象を知るが、それらは光線を持つものではない。それと同様に、眼〔根〕も〔根であるという点で〕それらと同様であるから、それ(眼根)が光線を持つものであることは不合理である。

耳根と眼根はいずれも根である。耳根と眼根は根である点で等しいが故に、耳根が光線を持つものではないならば、眼根も光線を持つものではないことになる。この論理は「ある二者が共通の性質を有するならば、その二者は互いに区別され得ない」という論理に基づいている⁶⁾。

TJによれば、これに対して以下の反論が想定される。

TJ ad MHK III 56cd[D69b6; P74a6-7]: gal te de ltar mig gi dbang po 'od zer dang ldan pa ma yin na(D; add. / P) 'o na ji ltar byi la dang 'ug pa dag mun khrod na mig dag las sgron ma ltar 'bar ba 'byung bar snang zhe na /

【反論】もしこのように眼根が光線を持つものでないならば、その場合、どうしてネコやフクロウが暗闇で眼から灯火のように光が生じているように見えるのか。

ネコ等の夜行性動物に関しては眼から光線を発することが経験されるから、眼根は光線を持つという反論である。この反論は『ニヤーヤ・スートラ』(Nyāyasūtra, NS)の議論が前提となっている。NSでは、眼光線説に対して、眼光線が存在するならばどうして知覚されないのかという批判がなされる。この批判に対する回答の一つに次のようなものがある。

NS 3.1.38: naktañcaranayanarāsmidarśanāc ca //

あるいはまた、夜行性動物の眼からの光線は見られるのであるから、〔眼光線が認識されないという反論者の主張は妥当ではない〕。(赤松[1990]訳)

ニヤーヤ学派は、眼光線の存在を証明するために、夜行性動物の眼光線を喩例として提示している。TJが想定している反論はまさにこのニヤーヤ学派の主張と一致している。このことから眼光線説批判においてニヤーヤ学派が特に念頭に置かれていると考えられる。

パーヴィヴェーカは、上記の反論に対して以下のように回答する。

MHK III 56cd: naktamcarākṣyadhīṣṭhānam dṛṣyaṃ dṛṣyaṃ na hikṣanam //

実に、夜行性動物の眼〔根〕の基体(=眼球, akṣyadhīṣṭhāna)が知覚されるのであり、眼〔根〕(ikṣana)が知覚されるのではない〔。それ故、夜行性動物の眼根を喩例とする反論も否定される〕⁷⁾。

夜行性動物の眼から光線が出ているように見える場合であっても、眼根の基体

である眼球が知覚されているのであり、眼根が知覚されているのではない。TJによれば、その理由は眼根は無見(anidarśana)即ち「それはこれだ」というように視覚的に指示できないものだからである⁸⁾。こうして、夜行性動物の眼根を喩例として眼根が光線を持つことを証明しようとする反論は退けられる。

2. サーンキヤ学派トリグナ説批判

次に、サーンキヤ学派のトリグナ(triguṇa)説が取り上げられる。TJによれば以下の主張が想定されている。

TJ ad MHK III 57[D70a1-2; P74b1-2]: grangs can dag mig ni bde ba dang sdug bsngal dang gti mug gi bdag nyid(D; add. ma P) yin te / 'di ltar yul yid du 'ong ba mthong na bde ba skye la / de las bzlog pa dag la sdug bsngal dang gti mug skye'o zhes zer bas de dgag pa'i phyir 'di bshad de /

サーンキヤ学派は「眼〔根〕は、楽(sukha)・苦(duḥkha)・癡(moha)を本質とするものである。すなわち、好ましい対象を見るとき楽が生じ、それと反対のものを〔見る〕とき苦と癡が生じる」と主張するので、そ〔の見解〕を否定するために、こ〔のMHK III 57ab〕を述べる。

サーンキヤ学派は、根本原質(prakṛti)とその展開物はサットヴァ(sattva)・ラジャス(rajas)・タマス(tamas)のトリグナから成ると主張する。眼根は根本原質からの展開物であるから、トリグナから成るものである。そして、そのサットヴァ・ラジャス・タマスは、ここで言われる楽・苦・癡に対応している⁹⁾。

パーヴィヴェーカは、この主張に対して次のように述べている。

MHK III 57ab: na sukhāyātmakaṃ cakṣur vastutvāt tadyathā pumān /

【主張】眼〔根〕は楽(sukha)等を本質とするものではない。

【証因】実在(vastu)だから。

【喩例】プルシャ(puṃs)のように。

TJの説明は以下の通りである。

TJ ad MHK III 57ab[D70a2-3; P74b3-4]: ji ltar zhe na mig de yod pa'am med pa'am / rtag pa'am mi rtag pa'am / gang yin yang rung ste / yon tan gsum gyi bdag nyid ma yin no // de ci'i phyir zhe na / dngos po dang rdzas yin pa'i phyir ro // ji lta bu zhe na / skyes bu bzhin te / 'di ltar de dag skyes bu ni yon tan med par 'dod pa'i phyir ro //

【問】どのようにか(ji ltar, *katham)。

【答】眼〔根〕、それは、〔原因に〕存在するものであれ、〔原因に〕存在しないものであれ、常住なものであれ、無常なもの(即ち作られたもの)であれ¹⁰⁾、いかなるものであれ、トリグナを本質とするものではない。

【問】それはなぜか。

【答】〔眼根は〕実在(vastu)であり、実体(rdzas, *dravya)であるからである。

【問】何のようにか。

【答】プルシャのようである。なぜなら、彼ら(サーンキヤ学派)はプルシャはグナを持たないということを認めるからである。

ここで用いられている論理は先の論証式と同様であると考えられる。プルシャと眼根は実在(vastu)である点で等しいが故に、プルシャがトリグナを本質としないならば、眼根もトリグナを本質とするものではないことになる。

3. 眼根遍在説批判

続いて取り上げられるのは、「眼根は遍在する(sarvagata)」という見解である。

TJは「ある者」の見解として紹介しているが¹¹⁾、ここでもまたサーンキヤ学派を主たる対論者として考えることができる¹²⁾。パーヴィヴェーカが提示する論証式のうちの一つは明らかにサーンキヤ学派を対論者として想定したものである。

サーンキヤ学派は、根は自我意識(我慢、ahaṃkāra)から展開したものであると考へ、自我意識が遍在するのと同様、根も遍在すると考へる¹³⁾。

パーヴィヴェーカが提示する論証式は以下の通りである。

MHK III 57cd-58: nāpi sarvagatam cakṣuḥ sattvāt tadgolakādivat //

atha vāsarvagantr akṣi pārāthyāt tadyathā ghaṭaḥ /

rūpopalabdhihetutvād yathā rūpaṃ tatheti vā //

さらに、〈論証式1〉

【主張】眼〔根〕は遍在するものではない。

【証因】存在するものだから。

【喩例】その眼球等のように。

あるいは、〈論証式2〉

【主張】眼〔根〕は遍在するものではない。

【証因】他のためにあるから。

【喩例】壺のように。

あるいは、〈論証式3〉

【主張】眼〔根〕は遍在するものではない。

【証因】色の知覚の原因だから。

【喩例】色のように。

〈論証式1〉について、TJは次のように注釈している。

TJ ad MHK III 57cd[D70a4-5; P74b6]: dbang po yang de'i khongs na 'dug pas thams cad du song ba ma yin no(D; add. // P) zhes bya bar bsams so //(D; om. P)

「根もそれ(眼球)の中に存在するから、遍在するものではない」ということが意図されている。

眼球と同様、眼根は特定の場所に存在するものであり、遍在するものではない。

次に、〈論証式2〉については、証因が「他のためにあるから」(pārāthyāt)であることからわかるように、明らかにサーンキヤ学派を意図したものである。サーンキヤ学派は、展開物は他者たるプルシャ(puruṣa)のために存在するとして、プルシャの存在証明を試みる¹⁴⁾。壺と眼根はいずれも他者のためにあるという点で等しいから、壺が遍在するものでないならば、眼根もまた遍在するものではないことになる¹⁵⁾。

最後の〈論証式3〉もその論理は同じである。色と眼根は色の知覚の原因である点で等しいから、色が遍在するものではないならば、眼根も遍在するものではないことになる¹⁶⁾。

4. 眼根火元素所成説批判

次に、否定されるのは、「眼根は火元素から成る」という見解である。TJでは「ある者」の見解として紹介されている¹⁷⁾。この見解を主張する学派として、ニヤーヤ学派やヴァイシェーシカ学派等が知られている。

パーヴィヴェーカはこの主張に対して以下のように述べる。

MHK III 59ab: na cakṣus tejahsamyuktam indriyatvāt tvagādivat /

【主張】眼〔根〕は火〔元素〕と結合したものではない。

【証因】根であるから。

【喩例】皮膚(=身根)などのように。

TJは特に説明を与えていないが、この論証式もこれまでと同様の論理で理解すべきであろう。ニヤーヤ学派やヴァイシェーシカ学派の見解では、身根は火元素から成るものではなく、風元素から成るとされる。身根と眼根は根であるという点で等しいから、身根が火元素と結合したものではないならば、眼根も火元素と結合したものではないことになる。

5. 眼根四元素所成火元素優勢説批判

さらに、パーヴィヴェーカは「眼根は、地・水・火・風の四元素(四大種)から成り、そのうちの火元素が優勢なものである」という見解を取り上げる¹⁸⁾。この見解は、『解脱道論』にその記述を見いだすことができるものであり¹⁹⁾、浪花[2001: 249, n.8]によれば、大衆部の一部が主張するものである。

この説をパーヴィヴェーカは次のように否定する。

MHK III 59cd: tejo'dhikaṃ mahābhūtaprasādādyātmakaṃ na ca //

さらに、

【主張】大種〔所造〕(mahābhūta)なる浄〔色〕等を本質とする〔眼根〕は火〔元素〕が優勢なもの(tejo'dhika)ではない。

【証因】根であるから。

【喩例】皮膚(=身根)などのように。]

ここで用いられている論理も、先の論証式と同様であると考えてよい。身根と眼根は根である点で等しいから、身根が火元素の優勢なものでないならば、眼根も火元素の優勢なものではないことになる。

6. サーンキヤ学派到達作用説批判

次に、サーンキヤ学派の到達作用説が批判される。TJによれば、サーンキヤ学派の主張は以下の通りである。

TJ ad MHK III 60[D70b4-5; P75a7-8]: grangs can dag yid ma gtogs pa'i dbang po lnga po dag ni yul dang phrad nas 'dzin par 'dod de / 'di ltar mig la sogs pa'i 'jug pa ni gnas nas phyi rol du 'phos nas yul 'dzin par byed do zhes zer ba ... /

サーンキヤ学派は「意〔根〕以外の五根は対象に到達して把握する」ということを認める。すなわち、「眼〔根〕等の作用は〔その〕基体

(*adhiṣṭhāna)から外に移動し対象を把握することである」ということを〔認める〕。

サーンキヤ学派は、眼根から身根の五根は対象に到達してその対象を把握すると考え、意根はその五根が把握した対象を分別する(samkalpa)と考える²⁰⁾。この主張に対して、パーヴィヴェーカは次のように述べる。

MHK III 60²¹⁾: na prāptaviṣayaṃ cakṣur indriyatvād yathā manah / rūpavat kāraṇatvād vā hetumatvāt tathāpi vā //

【主張】眼〔根〕は対象に到達するものではない。

【証因】根だから。

【喩例】意〔根〕のように。

あるいは、

【主張】眼〔根〕は対象に到達するものではない。

【証因】〔色の知覚の〕原因だから。

【喩例】色のように。

あるいは、

【主張】眼〔根〕は対象に到達するものではない。

【証因】原因を有するから。

【喩例】色のように。

TJは説明を与えていないが、これらの論証式もこれまでの論証式と同じ論理で解釈すべきであろう。

7. アビダルマ批判

最後に、アビダルマの見解が批判される。アビダルマは、根のうち、眼根・耳根・意根は対象と接触しないが、残りの鼻根・舌根・身根は対象と接触すると考える²²⁾。まずパーヴィヴェーカは、鼻根・舌根・身根が対象に到達して作用

するという見解を次のように否定する。なお、MHK III 62abでは、以下の各論証式の証因が不確定因であるか否かが問題となるため、鼻根・舌根・身根というそれぞれの主張主題ごとに論証式を別立てする。

MHK III 61: bāhyārthagrahaṇāt sākṣād atitānāgatāgrahāt /
na prāptaviṣayagrāhi ghrāṇādiṣṭam yathekṣanam //

〈論証式1〉

【主張】鼻〔根〕は対象に到達して把握するもの(prāptaviṣayagrāhin)ではない。

【証因】現前している(sākṣāt)外界対象〔のみ〕を把握し、過去と未来の〔対象〕を把握しないから。

【喩例】眼〔根〕のように。

〈論証式2〉

【主張】舌〔根〕は対象に到達して把握するものではない。

【証因】現前している外界対象〔のみ〕を把握し、過去と未来の〔対象〕を把握しないから。

【喩例】眼〔根〕のように。

〈論証式3〉

【主張】身〔根〕は対象に到達して把握するものではない。

【証因】現前している外界対象〔のみ〕を把握し、過去と未来の〔対象〕を把握しないから。

【喩例】眼〔根〕のように。

鼻根と眼根は現前している外界対象のみを把握し過去と未来の対象を把握しないという点で等しいから、眼根が対象に到達して把握するものではないならば、鼻根も対象に到達して把握するものではないことになる。このことは、舌根と身根についても当てはまる²³⁾。それ故、鼻根・舌根・身根はいずれも対象に到達

して把握するものではないことになる²⁴⁾。

次に、パーヴィヴェーカは、眼根・耳根・意根は対象に到達しないという見解を次のように否定する。

MHK III 63: trayam nāprāptaviṣayam manahśrotrākṣilakṣanam /
indriyatvād yathā ghrāṇam cittahetutvato 'pi vā //

【主張】意・耳・眼を特徴とする三者(意根・耳根・眼根)は対象に到達しないものではない。

【証因】根だから。

【喩例】鼻〔根〕のように。

あるいは、

【主張】意・耳・眼を特徴とする三者(意根・耳根・眼根)は対象に到達しないものではない。

【証因】心の〔生起の〕原因だから。

【喩例】鼻〔根〕のように。

TJは説明を与えないが、これらの論証式も先の鼻根等に関する論証式と同様に解釈すべきであろう。鼻根そして眼根・耳根・意根はいずれも根である点及び心の生起の原因である点で等しい。よって、鼻根が対象に到達しないものではないならば、眼根・耳根・意根もまた対象に到達しないものではないことになる。こうして、眼根・耳根・意根のいずれも対象に到達しないものであることは否定される。

8. 結語

他学派の者たちは、眼根を実在するもの即ち有自性なるものと見なし、眼根を見る主体や見る手段として構想するのみならず、光線を持つものやトリグナから成るもの等として様々に構想する。パーヴィヴェーカは、MHK III 56-63に

において、こうした眼根に関する様々な構想が妥当しないことを指摘して、眼根が無自性であることを明らかにしている。注目すべきは、本稿で扱ったいずれの論証式にも「勝義のレベルでは」(paramārthatas)という限定句が付されていない点である。田村[2009]で指摘したように、パーヴィヴェーカによれば、世俗のレベルでは視覚に関しては意(識)や眼根等の諸原因に基づいて眼識が生じるという事実があるのみであり、原因である意に見る作用が仮設され「意が見る」と比喩的に表現される。このように考えるパーヴィヴェーカにとっては、MHK III 56-63で取り上げられる諸学説は世俗のレベルでも認められないものである。また、パーヴィヴェーカが無自性論証において、自身の世俗的な観点に基づいて論証式を提示していることは、同論証の解明にあたって興味深い事実と言えるだろう。

【略号及び参考文献】

AK(Bh): *Abhidharmakośa (bhāṣya)* ed. P. Pradhan, 1967. MHK: *Madhyamakahrdaya-kārikā* ed. Ch. Lindtner. NS: *Nyāyasūtra* ed. W. Ruben. PPr: *Prajñāpradīpa*, D3853, P5253. PPrT: *Prajñāpradīpaṭīkā*, D3859 Sha. SK: *Sāṃkhyakārikā*. See YD. TJ: *Tarkajvālā*, D3856, P5256. YD: *Yuktidīpikā* ed. A. Wezler and Sh. Motegi. M. Tamura [2009] "Bhāviveka on the Proof of *niḥsvabhāvatā*," JIBS57-3: (94)-(98). 赤松 [1990] 「前期ニヤーヤ学派の知覚論—到達作用説の展開—」『哲学年報』49: 215-250. 江島 [1980] 『中観思想の展開』春秋社. 田村 [2009] 「パーヴィヴェーカによる五根の無自性論証」『南アジア古典学』4: 179-203. 浪花 [2001] 『新国訳大蔵経 解脱道論』大蔵出版. 野沢 [1956] 「清辨造『中論学心髓の疏・思挾灸』「真如知を求むる」章第三(IV)」『密教文化』34: 43-31(L). 村上 [1978] 『サーンクヤ哲学研究』春秋社.

注

- 1) 詳細は田村[2009]参照。
- 2) TJ ad MHK III 56ab[D69b4; P74a4]: kha cig mig gi 'od zer yul gyi phyogs su song nas 'dzin par byed do(D; add. // P)snyam du sems pa ... / (「ある者は『眼[根]の光線が対象の場所へ赴き、把握する』と考える」)

- 3) 『般若灯論』T30.66c27-67a4: 復次僧法人言。眼光到境。故能取色。如是意者。此亦不然。彼眼根光。於世諦中。亦不得有。何以故。色識因故。譬如彼色。
- 4) PPr ad MMK III 2[D78a4-5; P94a3-5]: gang dag la mig gi 'od zer yul gyi phyogs su song ste / yul 'dzin par byed do snyam pa'i blo gros yod pa de dag la yang 'di skad ces brjod par bya ste / tha snyad du yang mig gi dbang po ni 'od zer dang bcas pa ma yin par shes par bya ste / gzugs dmigs pa'i rgyu yin pa'i phyir dper na gzugs bzhin no // (「ある者たちは『眼[根]の光線が対象の場所へ赴き、対象を把握する』という見解を持っている。彼らに対しても次のように説かれるべきである。【主張】眼根は世俗のレベルでも光線を持たないと知られるべきである。【証因】色を知覚する原因であるから。【喩例】色のように」), PPrT[D16a6-7]: ... dpvod pa can dag gi gzhung las mig gi dbang po ni 'od zer dang bcas pa yin pas mig gi 'od zer yul gyi phyogs su song ste yul 'dzin par byed do zhes 'byung bas des na de dag la mig ni yul phrad pa 'dzin par byed do snyam pa'i blo gros yod pas ... /
- 5) ニヤーヤ学派の知覚理論については赤松[1990]を参照。
- 6) この論理についてはTamura[2009]を参照。
- 7) この補いはパラレルな議論が展開される『般若灯論』に基づくものである。PPr ad MMK III 2[D78a5-6; P94a5-6]: gal te mig gi dbang po ni 'od zer dang bcas pa kho na yin te / mig gi dbang po yin pa'i phyir dper na / byi ba la sogs pa mtshan mo rgyu ba'i mig bzhin no zhe na / de ni rigs pa ma yin te / mig gi dbang po ni bstan du med pa'i phyir dang / de'i gnas 'od zer dang bcas pa nyid yin du zin na yang dpe ma grub pa'i phyir dang / 'gal ba 'khrul pa med pa'i gnod pa yod pa'i phyir ro // (「もし『【主張】眼根は光線を持つものに他ならない。【証因】眼根であるから。【喩例】ネコ等の夜行性動物の眼[根]のように』と言うならば、それは不合理である。何故ならば(1)眼根は無見(anidarśana)であるから、(2)それ(眼根)の基体が光線をもつものだとした(夜行性動物の眼根は)喩例として成立しないから、また(3)相違決定(viruddhāvyaḥcārin)の誤謬があるからである』)『般若灯論』では、目下の反論に対して(1)から(3)の三つの理由を根拠に否定する。MHK III 56cdはそのうちの理由(1)に基づく回答である。
- 8) TJ ad MHK III 56cd[D69b7; P74a8]: mun khrod na mtshon mo rgyu ba rnam kyi mig gi 'bras bu snang bar zad kyi dbang po ni mi snang ste / de ni bstan du med pa yin pa'i phyir ro // (「暗闇で夜行性動物の眼球は知覚されるけれども、[眼]根は知覚されない。なぜならそれ(眼根)は無見だからである」)色処のみが有見(sanidarśana)であり、眼根を含むそれ以外ものは無見(anidarśana)であるとされる。AKBh 18.24-19.2(ad I 29ab)を参照。
- 9) 例えばYuktidīpikāは展開物が楽・苦・癡を本質とすると述べている。YD170.5(ad 17c): iha sukhaduhkhamohātmakatvād acetanam vyaktam avyaktam ca /

- 10) ここでは因中有果説及び因中無果説が意図されている。
- 11) TJは以下の〈論証式1〉(MHK III 57cd)の導入で次のように述べている。TJ ad MHK III 57cd[D70a3-4; P74b4-5]: kha cig mig ni thams cad du song ba yin te / blta bar bya ba thams cad la thogs pa med pa'i phyir ro snyam du sems pa de dag la 'di brjod par bya ste / (「ある者は『眼〔根〕は遍在するものである。なぜならどの知覚可能な対象に対しても妨げはない(thogs pa med pa, *apratigha)からである』と考える。彼らに対して次の〔MHK III 57cd〕が述べられるべきである」)
- 12) パーヴィヴェーカは、『大乘掌珍論』において、この見解をサーンキヤ学派(數論師)の見解として提示し(T30.271b20-23)、「亦非諸根遍一切處。有所因故。如根依處」(T30.271c16-17)という論証式によって否定している。
- 13) 根が遍在であるという説は、特にヴィンディヤヴァーシン(Vindhyavāsin)が主張したことで知られる。村上[1978: 263-265]参照。
- 14) TJ ad MHK III 58ab[D70a5-6; P74b7]: grangs can dag gzhan zhes bya ba ni shes pa'i skyes bu ste / mig la sogs pa ni de'i don gyi phyir 'dod do // (「サーンキヤ学派は、『他とは知者たるプルシャであり、眼〔根〕などはそのためである』ということ認める」) SK 17: saṅghātaparārthatvāt triguṇādiviparyayād adhiṣṭhānāt / puruṣo 'sti bhokṣṭṛbhāvāt kaivalyārthaṃ pravṛtteś ca //
- 15) TJ ad MHK III 58ab[D70a6-7; P74b8-75a1]: dper na bum pa ni gzhan dag la phan pa'i don gyi phyir mngon par sgrub par byed kyang de thams cad du 'gro ba ma yin pa de bzhin du mig kyang skyes bu'i don du mngon par sgrub par byed pa thams cad du 'gro ba ma yin no zhes bya ba(D; bar P)slob dpon gyis bsams so // (「例えば、壺は他者の利益のために現実化する(mngon par sgrub par byed pa, *abhinirharati)けれども、それは遍在するものではない。それと同様に、眼〔根〕もプルシャのために現実化する〔けれども〕遍在するものではない」ということを軌範師〔パーヴィヴェーカ〕は意図している」)
- 16) TJ ad MHK III 58cd[D70b1-2; P75a2-4]: ji ltar mig ni gzugs dmigs par 'gyur ba'i rgyu yin pa de bzhin du gzugs dmigs par 'gyur ba'i rgyu yin pas / dper na gzugs ni gzugs dmigs par 'gyur ba'i rgyu yin pa'i phyir kun tu 'gro ba ma yin pa de bzhin du mig kyang gzugs dmigs par 'gyur ba'i rgyu yin pa'i phyir kun tu 'gro ba ma yin no zhes bya ba'i tha tshig go // (「眼〔根〕が色の知覚の原因であると同様に、色は〔色の〕知覚の原因である。それ故、色が色の知覚の原因であるが故に遍在するものでないと同様に、眼〔根〕も色の知覚の原因であるが故に遍在するものではないという意味である」)
- 17) TJ ad MHK III 59ab[D70b2; P75a4]: kha cig na re mig ni me'i rang bzhin yin (D; om. P)te / gsal ba ches chen po dag gis zil gyis gnon pa'i phyir mar me bzhin no(D; add. // P)zhes zer ba de yang bzang po ma yin te / (「【反論】ある者は〔次のように〕主張する。【主張】眼〔根〕は火〔元素〕を自性とする。

- 【証因】より大きな光で圧倒するから。【喩例】灯火のように。【答論】そ〔の見解〕も適切ではない」)
- 18) TJ ad MHK III 59cd[D70b3; P75a5]: kha cig mig ni 'byung ba chen po bzhi'i rgyu las byung ba yin yang me(P; me'i D)shas che ba yin no snyam du sems pa(D; dpa' P)... / (「【反論】ある者は『眼〔根〕は、四大種所造であるけれども、火〔元素〕が優勢なものである』と考える」)なお、野沢[1956: 31, n.4]は、この見解が『成実論』(T32.266b16-19)における「諸外道」の説である可能性を指摘するが、その説は「五根は地・水・火・風・虚空の五大から成る」ということを前提としており、厳密には対応していない。
- 19) 『解脱道論』T32.445c29-446a1: 四大所造。火大最多。此清淨色。謂爲眼入。
- 20) 村上[1978: 262-271]参照。
- 21) 江島[1980: 361]が指摘するように、MHK III 60-64はMsとチベット語訳・TJの間で順序の相違がある。本稿が底本としたLindtnerの校訂テキストはTJの順序に従っている。Msの順序は64→60→62→61→63である。なお、62cdはチベット語訳及びTJでは欠如しており、63cdはチベット語訳では欠如しTJでは散文として訳出されている。
- 22) AK I 43cd: cakṣuḥśrotramano 'prāptaviṣayaṃ trayam anyathā //
- 23) TJ ad MHK III 61[D71a2; P75b4-5]: ji ltar sna dang lce dang lus kyi dbang po dag ni phyi rol gyi don mngon sum du gyur pa dag 'dzin pa dang / 'das pa dang ma 'ongs pa dag mi 'dzin pa bzhin du mig gi dbang po yang de bzhin te / mig gi dbang po ji lta ba bzhin du(D; add. / P)de dag kyang yul phrad pa 'dzin pa ma yin no // (「鼻根と舌根と身根が現前している外界の対象〔のみ〕を把握し、過去と未来の〔対象〕を把握しないのと同じように、眼根もまたそのようである。それと同様に、眼根と同じように、それら(鼻根・舌根・身根)もまた対象に到達して把握するものではない」)
- 24) 従って、例えば〈論証式1〉に関して身根によって証因が不確定因となることはない。MHK III 62ab: sādhyatulyaniṣedhāc ca nānekāntas tvagādibhiḥ / (「そして、〔MHK III 61で提示する論証式における証因は〕皮膚(=身根)等によって不確定〔因〕とならない。なぜなら論証の対象(sādhyā)と同様に〔対象到達把握性〕は〕否定されるからである」)また、このことは続く眼根・耳根・意根に関する論証式についても言える。MHK III 62cd: nayenānena boddhavyaṃ pratyuktam śravaṣādy api // (「以下のMHK III 63で論証式を提示する」)耳〔根〕等についても〔証因が不確定因となるという反論に対して〕この方法によって論駁されると理解すべきである」)

Bhāviveka's Criticism of Realistic Views of the Five Sense Organs (*pañca-indriya*)

Masaki TAMURA

In his *Madhyamakahrdayakārikā* (MHK) III 45-65, Bhāviveka formulates an argument to prove the absence of *svabhāva* in the five sense organs. In MHK III 45-55, rejecting the views of a visual organ as an agent of seeing and as an instrument of seeing, Bhāviveka presents his own view: At the conventional level, there is no act of seeing; it is simply the case that a visual cognition arises from causes and conditions.

In MHK III 56-63, Bhāviveka goes on to reject the following realistic views of the five sense organs:

- (1) The visual organ consists in the ray of light (*raśmi*) which resides in the eyeball;
- (2) The visual organ is composed of three constituent elements (*triḡuṇa*): pleasure (*sukha*), pain (*duḡkha*), and delusion (*moha*);
- (3) The visual organ is all-pervading (*sarvagata*);
- (4) The visual organ consists in fire (*tejas*);
- (5) The visual organ, consisting of physical elements (*bhautika*), has fire (*tejas*) as a predominant one (*adhika*);
- (6) The visual organ reaches an object and grasps it, that is, the visual organ grasps an object in direct contact with the object (*prāpyakārin*);
- (7) The olfactory, gustatory, tactile organs are *prāpyakārin*s, while the visual, auditory, and mental organs are not.

It is clear that Bhāviveka argues here that a sense organ does not have an intrinsic property such as that of being consisting in the ray of light. It is to be noted that he does not put the modifier *paramārthataḡ* 'in ultimate reality' into

the arguments to disprove the above-mentioned views. For Bhāviveka, the views are never accepted even at the conventional level.

On Literary Features in Kṣemendra's Buddhist Narrative Work: The Story of Kuṇāla

Kazuho YAMASAKI

Kṣemendra, who flourished in Kashmir in the eleventh century, is a prolific and erudite poet. He composed a voluminous Buddhist narrative work, the *Bodhisattvāvadānakalpalatā* (Av-klp), which consists of 108 chapters (*pallavas*). Although a large number of studies have been made on the source of Av-klp, little attention has been given to its literary aspects as a *kāvya*. In this paper, by comparing the story of Kuṇāla in *Ku na la'i rtogs pa brjod pa* (Kun) with the one in Av-klp, I have considered a few instances in which Kṣemendra employs a rhetorical and demonstrates his prosodic skills.

From a literary point of view, Av-klp is characterized by the character sketch with *kulaka*, a succession of stanzas forming one sentence. From a rhetorical point of view, it is characterized by the use of *arthāntaranyāsa*, a figure of speech which is defined as an illustration of a particular case by a general truth and by the use of *śleṣa* (double-entendre). What is interesting to note is that Kṣemendra effectively uses *gaṇacchandās* meters such as *āryā* and *gīti* when singing a ballad is suitable to a given context.

Kṣemendra's version of the story of Kuṇāla is not a mere epitome of little literary merit. It is the work through which Kṣemendra exerts his skill as a poet to make the story more entertaining.

TETSUGAKU
THE JOURNAL
of
HIROSHIMA PHILOSOPHICAL SOCIETY
VOL. LXI 2009
CONTENTS

Articles

- Drei Motive der Lehre vom Kampf in der Hegels Philosophie des Geistes von 1805/06
 Tomoki HAZAMA... (1)
- Vom Vertrag und Gesellschaftsvertrag in Hegels *Rechtsphilosophie*
 Junya HAMAI... (15)
- Die Beobachtungserfahrungen der Vernunft in Hegels *Phänomenologie des Geistes*
 —Um das Unorganische und das Organische— Takashi NOMURA... (29)
- Eine Interpretation der „sinnlichen Gewißheit“ in Hegels *Phänomenologie des Geistes*
 —aufgrund der Methode der „Einleitung“— Yasuhiro IWATA... (43)
- Die Konstitution der Seele bei Husserl neu gedacht Hiroshi GOTO... (57)
- Bhārtṛhari's Theory of Time: What is the Ground for the Use of Tenses?
 Jaehyung YI... (71)
- On the Concept of Validity in the Theory of Intrinsic Validity
 Suguru ISHIMURA... (85)
- Bhāviveka's Criticism of Realistic Views of the Five Sense Organs (*pañca-indriya*)
 Masaki TAMURA... (99)
- On Literary Features in Kṣemendra's Buddhist Narrative Work: The Story of Kunāla
 Kazuho YAMASAKI... (115)
- The Connection Between 魯公 and 魯君 in 左伝 Takuji HANAFUSA... (129)
- The structure of the monarch-subjects relation in ZhongZhangtong (仲長統)
 “Changyan (昌言)” Hiroshi ITO... (143)
- News (157)

HIROSHIMA UNIVERSITY
 HIROSHIMA, JAPAN

哲
學第
六
十
一
集廣
島
哲
學
會

哲 學

第 61 集

- ヘーゲル1805/06年の精神哲学における闘争論の三つのモチーフ… 智樹… (1)
- ヘーゲル『法の哲学』における「契約」と「社会契約説」……濱井 潤也… (15)
- ヘーゲル『精神現象学』における理性の観察経験
 —非有機体と有機体をめぐって—……野村 卓史… (29)
- 『精神現象学』「緒論」に即した「感覚的確信」の解釈……岩田 康弘… (43)
- フッサールにおける心の構成—再考……後藤 弘志… (57)
- バルトリハリの〈時間〉論
 —〈時間〉性決定の根拠に関連して—……李 宰炯… (71)
- 自律的真理論における〈真〉の概念について……石村 克… (85)
- バーヴィヴェカによる五根の無自性性論証
 —他学派学説批判を中心に—……田村 昌己… (99)
- クシェーメンドラの仏教説話に見られる文学技巧について
 —「クナーラ・アヴァダーナ」を中心に—……山崎 一穂… (115)
- 『左伝』の「魯公」・「魯君」……花房 卓爾… (129)
- 仲長統『昌言』における君臣関係の構造……伊藤 浩志… (143)
- 彙 報 (157)

廣 島 哲 學 會

編集後記

ことしは昨年ほど暑くはなかったが、九月末の時点でも大学構内でまだ蝉が鳴いている。それなりの暑さということであろう。このような暑さが常態化すれば、最初は奇異に思えた九月一杯の夏休みも、慧眼であったということになるだろう。

さて、ことしの広島哲学会「哲学」第61集掲載論文は全11本である。内訳は欧米系が5本、インド系が4本、中国系が2本である。それなりにバランスはとれているように思われる。各論文の質も、それぞれの専門できちっと査読しているので一応の水準は保たれている。だが、最近大学院生以外の応募論文が極端に少なくなっている。編集者としては、全国に散らばっている学会員にも奮って応募してもらいたい。来年度は掲載しきれないぐらいの好論文が寄せられることを期待したい。

(2009.9 H. Y. 記)

学会費納入は、従来の郵便振替(01300-8-12413)に加えて、銀行振込(広島銀行西条支店・広島哲学会 理事長 水田英実(ミズタヒデミ) 051-3131220)も御利用下さい。

なお領収書をご希望の方は会計係までお申し付け下さい。

住所・所属変更の際は、すみやかに庶務係(739-8522 東広島市鏡山 1-2-3 広島大学文学部内広島哲学会 Tel. 0824-24-6632)までご連絡下さい。

哲 學 第61集

平成21年10月20日印刷

平成21年10月25日発行

編集兼 (広島大学文学部内)
発行者 広 島 哲 学 会
代表者 水 田 英 実
印刷者 三好印刷株式会社
広島県三原市本町1-8-12